

兵庫・茂利宮^{しげりみやのにし}の西遺跡

- 1 所在地 兵庫県多可郡中町中村町茂利
- 2 調査期間 一九九七年（平9）一月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 4 調査担当者 森内秀造・矢野治巳・高木芳史
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（生野）

茂利宮の西遺跡は兵庫県内陸部の中町にあり、加古川の支流である杉原川によって形成された盆地平野の中央に位置する。遺跡は杉原川西岸の段丘上にあり、西から東へ下る扇状地上の緩斜面に立地する。

茂利宮の西遺跡は中世の金属関係の生産遺跡として知られる。町教委によって行なわれた発掘調査では、溝による区画とその中に建てられた建物などの遺構が

確認されており、これらの遺構には多量の炭・焼土が堆積していたほか、ピットなどからも、比較的多くのスラッグが検出されている。また、当調査事務所が一九九七年度に行なった発掘調査では、弥生時代から室町時代にわたる時期の遺構、遺物が出土している。やはり埋土中に炭、焼土、及びスラッグなどを多量に含む土坑が多く検出されており、精錬あるいは鑄造などに関与した生産遺跡であると考えられる。

本調査地点は、遺跡の東端にあり、扇状地上の緩斜面から平坦地へと変わる地形の変換点にあたる。調査地点全体を黒色の粘土層が厚くおおっており、同層中からは弥生時代から平安時代の土器が出土しているが、特に平安時代のものが中心をなしている。

木簡は、この黒色粘土層を切って構築された室町時代の井戸の底から出土している。共存遺物にはわずかな土器片があるが、いずれも細片で器形を復原できない。井戸は石組みで、自然及び半加工した川原石を用いて作られている。井戸口の直径は七〇cm、底部では九〇cmを測り、袋状の断面形を呈している。深さは現状で二mを測るが、削平を受けているため、本来はまだ三〇cm以上の深さがあつたと思われる。井戸の他には、ピット・土坑・溝があるが、炭・焼土・スラッグなどは検出されておらず、金属生産に関わるような性格のものは全く見られない。

8 木簡の积文・内容

(1)

〔奉納本カ〕

□□□□□□

〔二年カ〕

□□観應□□

(124)×(25)×8 061

桶の底板に転用されたもので、弧をなす側の側面には二カ所に木釘でとめるための穿孔が見られる。材質はヒノキである。弧度から元来の大きさは直径約一九四mmに復原できる。墨痕は完全に流失しているが、墨のあつた部分に残る盛り上がりから、少なくとも一〇字が観察できる。一行めは左半のみ残存する。四文字めは言偏を読むことができる。二行めは二字めと三字めの「観應」の二字は明瞭で元号と考えられる。「應」の下は「二年」と判読できる可能性が高いが、全体の字配りからすると一文字分しかなく、観応元年(三年(一二五〇)~一二五二)の干支である「庚寅」「辛卯」「壬辰」のいずれかの頭一文字である可能性も考えられる。

なお、木簡の釈読に関しては、兵庫県立歴史博物館小林基伸氏、松井良祐氏よりご教示を得た。材質については、当調査事務所の藤田淳氏の顕微鏡観察結果による。

9 関係文献

兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所『平成八年度 年報』(一九九七年)

(高木芳史)

